

## マヤ文字を解く

著者	八杉 佳穂
発行年	1982-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5555">http://hdl.handle.net/10502/5555</a>

## あとかぎ

マヤ文字はもはや神秘の文字ではない。解読不可能の文字でもない。しかし、マヤ文字はいまだに解読されたとはいえない文字である。碑文の内容はだいぶわかるようになったものの、実際に解読された文字は、ほんの少ししかない。残された文字は多い。そのなかには、王朝史にまつわる出来事のほかに、宗教的内容や天文学的内容を記した文字も含まれている。そういうもののほとんどはよくわかっていないし、ここではいっさいふれなかった。また絵文書や土器の文字もほとんど扱わなかった。それは、マヤ文明の歴史を文字から書いてみたかった理由のほかに、それらの主題である宗教、儀式的なことを理解するには、神々の体系や儀式、ことばの秘義的な用法の研究など、歴史を扱うのとはかなり違ったアプローチが必要だからであった。またそうした内容は、証明がむずかしいことも理由の一つであった。この書でふれなかったものは、文字に關してだけでもたくさんある。

マヤ遺跡を訪れると、ガイドブックを手に遺跡をみる人によく出会った。私は本書を、マヤ文字の基礎から一つ一つ積みあげていって、最後には碑文の主内容である王朝の歴史がテキストの

分析から得られるようにと願って書いたのであるが、マヤ文字の入門書的な役割が果たせたら、という願いもあった。本書でふれなかった文字はたくさんあるのだが、本書を手に碑文をながめてみたいと思う人が一人でもでてくるとすれば、なんという幸せであろうといま夢みている。

マヤ文明の研究は、この一〇年あまりのあいだに急速に進みはじめた。新しい発見もあった。つい最近、ペテン中心部のポロルでバクトゥン7を刻む祭壇がみつかったと報じられたが、これなど、もし事実なら、従来のマヤ文字の起源に関する説を大幅に変えなければならぬ発見である。旧来の説の大幅な変更が行なわれ、新しい知見がたくさん得られ、日に日にマヤ文明観は変わっている。本書のなかでもとくに六章などは、この数年のうちに大幅に書きかえねばならなくなるにちがいない。

マヤ文字資料の散逸は激しく、日本にもたくさんマヤ土器や石彫がはいつてきているという。ところがその所在さえつかめない。マヤ文字の解説がむずかしい原因の一つは、マヤ文字資料が限られていることである。研究者は、一つでも多くの資料を共有し、利用したいという願いをもっている。私としては、せめて日本に流入した資料だけでも把握しておかねばならないと思っている。

この書を手にとって下さった方のなかには、そうした資料やマヤ文明に関する情報をおもちの方があられるであろう。ぜひ日本におけるマヤ文字資料集の作成にご協力を願いたい。

連絡先 千565 吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館内

八杉佳穂

この本が生まれるきっかけを作って下さったのは、東京大学教授の増田義郎先生である。先生には原稿段階でもご指導いただいた。心からお礼申し上げます。

また、中央公論社の永倉あい子、村山文子両氏には、本が仕上がるまでの長いあいだお世話になった。厚くお礼申し上げます。

一九八二年二月

著者